

新型コロナ禍に思う



出口 明 夫
Deguchi Akio
(建設部門)

○はじめに

今年にはコロナ禍に始まり、コロナ禍に暮れそうである。昨年 12 月頃に中国湖北省武漢市で発生したとされる新型コロナウイルスに関して、1 月下旬に武漢市の「都市封鎖」が報道された。これを皮切りに中国からの帰国者を乗せた日本政府チャーター便の第一便が成田空港に到着したこと、続いて、香港・台湾などに立ち寄った後に、横浜港に帰港したクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス (DP)」号での集団感染の発生について、連日大きく報道されるようになった。多くの日本人は否が応でも新型コロナのニュースに大きな関心を持たざるを得なくなったと思われる。

政府は DP 号の下船を認めず、洋上で 2 週間の検疫を始めたが、船内の感染症対策の不十分さが指摘されたほか、検疫を経て下船した乗客が陽性診断される事例などが発生した。最終的に、DP 号での感染者は計 712 人 (うち死者は 13 人) に上り、日本政府にとって、DP 号での集団感染の発生は、新型コロナウイルス対策で最初の大きな試練となった。

その最中に、国内で初の死者が確認され、さらに中国渡航歴がなく、感染経路の不明な感染者が相次いで報告され、いよいよ「市中感染」が現実味を帯びてきたのであった。この頃から、多くの人々は、この未知の新型コロナに恐怖を覚えるようになったのではないと思われる。

○新型コロナウイルスとは

「新型コロナ」に耳慣れした頃になって「コロナ」、「新型」って何だろうか? とふと思ひ、暇にまかせて調べてみた。

「コロナ」の語源は「冠」であろうとは思っていたが、電子顕微鏡で見ると、周りに冠状のギザギザがついた形をしているので「コロナウイルス」という名がついたようである。コロナウイルスには多くの種類があるが、人に感染するのは、今回で 7 種類目となる。2002 年以前から知られていたコロナウイルスは 4 種類で、普通の風邪の原因となるウイルスだ。

「新型」は、2002 年以降に発見された 3 種類のコロナウイルスにつけられている。

「新型」の特徴は、従来のコロナウイルスと違って風邪症状にとどまらず、肺炎など肺の病気を引き起こす「命」に関わる病気となったことである。

まず、2002年11月に中国広東省広州で発見され、SARS（重症急性呼吸器症候群）と呼ばれる病気の原因となるウイルスで、ハクビシンなどの哺乳類から感染し、致死率も高く約10%、感染者は延べ8,000人ぐらいで2003年7月、WHOが流行の終息宣言をした。その後、2012年に中東で発見され、ラクダから感染し、MERS（中東呼吸器症候群）と呼ばれ、2015年に、韓国で拡大感染、致死率はさらに高く30%ぐらい死亡したようである。

今回は7番目のコロナウイルスで、2020年3月12日、WHOがパンデミック宣言を出した。日本では「新型コロナウイルス」と呼んでいるが、ウイルス学者の間では、「SARS-CoV-2」と呼ばれ、ウイルスが引き起こす病気には「COVID-19」という名前が付けられている。

今回の「新型コロナウイルス」の特徴は、「命」に関わる病気であることのほかに、以下の特徴が報告されている。1点目は、8割は、軽症のまま約1週間で自然治癒し、2割は、はじめは軽症であっても1週間ぐらい経ってから息が苦しくなる気道感染の症状が出る。2点目は、従来のインフルエンザやSARSは発症初期からはっきりした症状が出るが、今回の新型コロナは発症初期の症状は、ほとんど風邪みたいなものだが、これがタチが悪いことに感染力が変わりはなく、この間に感染が拡大することだ。

3点目は、高齢になるほど罹りやすい傾向があり、特に糖尿病、高血圧といった持病を持っている人は、重症化しやすいことである。最後に、SARS、MERSと同じく、現時点では有効な予防薬もなければ治療薬もなく、そのうえに厄介なことに様々な後遺症の存在まで報告されている。まさに致命的である。我々高齢者が極度に恐れるのも、むべなるかなであろう。

しかし、この厄介な新型コロナウイルスにもほんの少しだけではあるが、気を緩められることがあるとすれば、それは小さな子供ほど感染者が少なく、罹っても軽傷で済むことが多いということであろう。とは言っても子供さんのいるお母さん達の気遣いは少しも変わらないことだが・・・。

○ウィズコロナとは

それにしてもこのウイルスは、グローバル経済の波に乗って瞬く間に全世界に拡散した。これほどの「世界的大流行」を短期間に果たした感染症は、これまでに類を見ないと言われている。10月中旬現在、世界全体の感染者数は、4,000万人を、死者は100万人を超えた。特に、米国や欧州各国では第2波の勢いが増しており、終息の気配は全く感じられない。

一方、日本国内では第2波のピークを過ぎ、感染者数は9万数千人、死者は1,600人程度で、新規感染者数は、9月以降は、概ね一日に400人～600人前後で推移している。

(DP)号で集団感染が発生して以降、政府の対応には様々な不手際や混乱が指摘されてきたが、政府も医療関係者も国民もみんなが初めての経験であり、手探り状態の中で大きな混乱も無く、世界全体の傾向と比べると日本国内は感染率、致死率ともかなりよく抑えられてきたと思われる。

しかし、まだまだ油断はできない。有効なワクチンや治療薬が開発されるまでにはまだ相当の期間が必要であろう。その間、このウイルスにどのように対処すべきだろうか。

ウイルスと共存しながら感染の拡大を防ぐ手立ては、いつに人と人が接触するあらゆる行動を可能な限り減らすことである。これを煎じ詰めれば「経済活動」と「健康(命)」、この二つのバランスをいかにとるか、に尽きるであろう。

この頃から「ウィズコロナ」とか「新しい生活様式」といった言葉が存在感を増してきたように思われる。

経済活動は、いつまでも自粛や休業を続けるわけにはいかない。感染状況を見ながら徐々に回復していかざるを得ない。企業など組織の中で働く人々には、テレワークとかりモートワークやウェブ会議などの動きが加速されている。通信販売や宅配便も急増しているようである。

一方、健康(命)は自分で守るしかない。個人ができることは、外出の控え、三密回避、人との距離の確保、マスク、手洗いの徹底などの自粛生活であろうか。

人は身近なところで頻繁に発生するリスクは過少にとらえ、未経験のリスクには未知への不安から過度に恐れる傾向があるとされている。新型コロナは、もちろん甘く見てはいけませんが、逆に過度に恐れることもよくない。恐怖は冷静さと寛容さを失い互いに孤立しかねない。

「ウィズコロナ」とは「感染しているかもしれない人がそこにいても、まずは自分が感染しないように徹すること、次に、自分が罹っているかもしれないと思って、他の人へ感染させないように心掛けること」、こういった思いやりの接し方が大切だと言われている。

新型コロナの特性を良く知ったうえで、自分を守り、他人も守り、経済活動を維持継続することが「ウィズコロナ」であろう。

○ポストコロナについて

現在、世界中で新型コロナウイルスに対するワクチンの研究開発が盛んに行われているが、安全性、有効性の確認が必要であり、実用化の見込みは定かではない。

ウイルスの感染力が強まる今冬は、季節性インフルエンザ流行期と重なるが、これを何とかしのぎ、来年の前半期までにワクチンの開発が実現すれば・・・というのが多くの国民の期待ではなからうか？

今年は、東京オリンピックを延期し、小中高大の卒業式・入学式や全国高等学校野球大会も中止、阿波踊りなど大きな祭りやイベントが、全国的にことごとく中止された。

しかし、次第に新型コロナウイルスに関する知見が積み重ねられて、未知の部分が縮小してきているであろう、また、人々は、少しずつ「ウィズコロナ」や「新しい生活様式」に慣れてきていると思われる。そこで来春頃からは、従来から行われてきた行事などは全面中止ではなく、感染防止の工夫を凝らしたうえ、形を変えるなり、規模縮小してでも、何としてもやるという方向に進むのではなかろうか。その典型がオリンピックであり、是非そうあってほしいものである。

□東京一極集中を見直す好機・地方への移住の流れ

今回の新型コロナ禍の経験をもとに「東京一極集中を見直す好機である」との意見が多く見られる。

東京圏は経済活動には、便利で効率的であろう。しかし、過密であるがために、首都直下地震や大河川の氾濫などの自然災害に脆弱であることは以前より指摘されていたことであるが、今回の新型コロナ禍で、首都圏が感染症にも脆いことが明らかになった。

一方で、テレワークとリモートワークの取り組みが急速に進み、在宅・遠隔地でも仕事ができるとの評価も出ているようである。満員電車の解消・通勤時間の短縮というメリットもあり、一極集中が方向転換する契機になればと思う。

□地方分権・地方自立の好機

また、全国の小中高一斉休校の国からの要請は、超過密の大都市圏と消滅が危惧される地方では、感染状況にも大きな差異があり対応も当然違っていいはずであり、タイミングの唐突さもあって不評であった。これ以降、コロナ対応はそれまでの「国の指示を待つ」から都道府県の「自主的な対応」が見られるようになった。この経験は今後、国と地方の関係に変化を起こすのではなかろうか。

□自然との共生

最後に、国立環境研究所の五箇公一氏の徳島新聞記事（大型評論 - 新型コロナと文明）から一部を引用紹介したい。

『ウイルスは地球上の生態系バランスを維持するために存在している。われわれ人間がその生態系を破壊し続け、野生生物とウイルスが生息するエリアの奥深くまで足を踏み入れたことで、ウイルスとの接触機会が増大し、彼らを自然界から人間社会にスピルオーバー（噴出）させている。・・・』

現代に入って人間社会を脅かしているエイズウイルス(HIV)やエボラ出血熱ウイルス、デング熱ウイルス、ジカ熱ウイルスなどの新興感染症はすべて自然破壊と環境かく乱の産物とされる。今回の新型コロナウイルスは、新興感染症の最先端に位置付けられる。・・・今回の新型コロナウイルス禍からわれわれが学ぶべきことは、・・・自然と共生する資源循環型社会を目指して生活を変容させることの必要性であろう。』